

# 氷河鼠の毛皮

宮沢賢治

青空文庫



このおはなしは、ずるぶん北の方の寒いところからきれぎれに風<sup>かぜ</sup>に吹きとばされて来たのです。氷がひとでや海月<sup>くらげ</sup>やさまざまのお菓子<sup>お菓子</sup>の形<sup>かたち</sup>をしてゐる位寒い北の方から飛ばされてやつて来たのです。

十二月の二十六日の夜八時ベーリング行の列車に乗つてイーハトヴ<sup>トヴ</sup>を発<sup>た</sup>つた人<sup>ひと</sup>たちが、どんな眼<sup>め</sup>にあつたかきつとどなたも知りた<sup>た</sup>いでせう。これはそのおはなしです。

×

ぜんたい十二月の二十六日はイーハトヴはひどい吹雪でした。

町の空や通りはまるつきり白だか水色だか変にばさ／＼した雪の粉でいつぱい、風はひつきりなしに電線や枯れたポプラを鳴らし、<sup>からす</sup>鴉なども半分凍つたやうになつてふらく／＼と空を流されて行きました。たゞ、まあ、その中から馬そりの鈴のチリンチリン鳴る音が、やつと聞えるのでやつぱり誰か<sup>たれ</sup>通つてゐるなといふことがわかるのでした。

ところがそんなひどい吹雪でも夜の八時になつて停車場に行つて見ますと暖炉の火は愉快に赤く燃えあがり、ベーリング行の最大急行に乗る人たちはもうその前にまつ黒に立つてゐました。

何せ北極のちき近くまで行くのですからみんなはすつかり用意

してゐました。着物はまるで厚い壁のくらゐ着込み、馬油を塗つた長靴ながぐつをはきトランクにまで寒さでひびが入らないやうに馬油を塗つてみんなほうくしてゐました。

汽罐車きくわんしゃはもうすっかり支度ができて暖さうな湯気を吐き、客車にはみな明るく電燈がともり、赤いカーテンもおろされて、プラツトホームにまつすぐにならびました。

『ベーリング行、午後八時発車、ベーリング行。』一人の駅夫が高く叫びながら待合室に入つて来ました。

すぐ改札のベルが鳴りみんなはわい／＼切符を切つて貰つてトランクや袋を車の中にかつき込みました。

間もなくパリパリ呼子が鳴り汽罐車は一つポーとほえて、汽車

は一目散に飛び出しました。何せベーリング行の最大急行ですから実にはやいもんです。見る間にそのおしまひの二つの赤い火が灰いろの夜のふゞきの中に消えてしまひました。こゝまではたしかに私も知つてゐます。

×

列車がイーハトヴの停車場をはなれて荷物が柵たなや腰掛の下に片付き、席がすっかりきまりますとみんなはまづつくづくと同じ車の人たちの顔つきを見まはしました。

一つの車には十五人ばかりの旅客が乗つてゐましたがそのまん

中には顔の赤い肥ふとつた紳士がどつしりと腰掛けてゐました。その人は毛皮を一杯に着込んで、二人前の席をとり、アラスカ金の大きな指環ゆびわをはめ、十連発のぴかぴかする素敵な鉄砲を持つていかにも元氣さう、声もきつとよほどがらがらしてゐるにちがひないと思はれたのです。

近くにはやつぱり似たやうなりの紳士たちがめいめい眼鏡めがねを外したり時計を見たりしてゐました。どの人も大へん立派でした。がまん中の人にくらべては少し瘦やせてゐました。向ふの隅すみには瘦た赤ひげの人が北極ほくきよくぎつね狐のやうにきよとんとすまして腰を掛けこちらの斜はすかひの窓のそばにはかたい帆布はんぷの上着を着て愉快さうに自分にだけ聞えるやうな微かすかな口笛を吹いてゐる若い船乗りら

しい男が乗つてゐました。そのほか瘦て眉も深く刻み陰気な顔をぐわいたう外ぐわいたう套ぐわいたうのえりに埋てゐる人さつぱり何でもないとねむいふやうにもうねむ睡りはじめた商人風の人など三四人居をりました。

×

汽車は時々素通りする停車場の踏切でがたつと横にゆれながら一生けん命ふゞきの中をかけました。しかしその吹雪もだんくをさまつたのかそれとも汽車が吹雪の地方を越したのか、まもなくみんなは外の方から空気にお押しつけられるやうな気がし、もう外では雪が降つてゐないといふやうに思ひました。黄いろな帆布



の青年は立つて自分の窓のカーテンを上げました。そのカーテンのうしろには湯気の凍り付いたぎらぎらの窓ガラスでした。たしかにその窓ガラスは変に青く光つてゐたのです。船乗りの青年はポケットから小さなナイフを出してその窓の羊歯しだの葉の形をした氷をガリガリ削り落しました。

削り取られた分の窓ガラスはつめたくて実によく透とほり向ふでは山脈の雪が耿かうかう々とひかり、その上の鉄いろをしたつめたい空にはまるでたつたいまみがきをかけたやうな青い月がすきつかゝつてゐました。

野原の雪は青じろく見え煙の影は夢のやうにかけたのです。唐た檜うひやとゞ松がまつ黒に立つてちらちら窓を過ぎて行きます。じつ

と外を見てゐる若者の唇は笑ふやうに又泣くやうにかすかにうごきました。それは何か月に話し掛けてゐるかとも思はれたのです。みんなもしんとして何か考へ込んでゐました。まん中の立派な紳士もまた鉄砲を手に持つて何か考へてゐます。けれども俄にはかに紳士は立ちあがりました。鉄砲を大切に棚たなに載せました。それから大きな声で向ふの役人らしい葉巻をくはへてゐる紳士に話し掛けました。

『何せ向ふは寒いだらうね。』

向ふの紳士が答へました。

『いや、それはもう当然です。いくら寒いと云つてもこつちのは相対的ですがなあ、あつちはもう絶対です。寒さがちがひます。』

『あなたは何べん行つたね。』

『私は今度二回目ですが。』

『どうだらう、わしの防寒の設備は大丈夫だらうか。』

『どれ位ご支度なさいました。』

『さあ、まあイーハトヴの冬の着物の上に、ラツコ裏の内外うちぐわいた套うね、海狸びばあの中外套ね、黒くろぎつね狐つね表裏の外外套ね。』

『大丈夫でせう、ずるぶんいゝお支度です。』

『さうだらうか、それから北極兄弟商会。パテントの緩慢燃燒外套ね……。』

『大丈夫です』

『それから氷河鼠ひようがねずみの頸くびのこの毛皮だけでこさへた上着ね。』

『大丈夫です。しかし氷河鼠の頸のとその毛皮はぜい沢ですな。』  
『四百五十足びき分だ。どうだらう。こんなことで大丈夫だらうか。』  
『大丈夫です。』

『わしはね、主に黒狐をとつて来るつもりなんだ。黒狐の毛皮九百枚持つて来てみせるといふかけをしたんだ。』

『さうですか。えらいですな。』

『どうだ。祝しゆくはい盃はいを一杯やらうか。』紳士はステームでだんだん暖まつて来たらしく外套を脱ぎながらウエスキーの瓶びんを出しました。

すぢ向ひではさつきの青年が額をつめたいガラスにあてるばかりにして月とオリオンとの空をじつとながめ、向ふ隅すみではあの瘦やせ

た赤髯あかひげの男が眼をきよろきよろさせてみんなの話聞きすまし、酒を呑み出した紳士のまはりの人たちは少し羨ましうらやさうにこの豪勢な北極近くまで猟に出かける暢気のんきな大将を見てゐました。

×

毛皮外套をあんまり沢山もつた紳士はもうひとり外套を沢山もつた紳士と喧嘩けんくわをしましたがそのあとの方の方はたうとう負て寝たふりをしてしまひました。

紳士はそこでつゞけさまにウヰスキーの小さなコップを十二ばかりやりましたらすつかり酔ひがまはつてもう目を細くして唇くちびるを

なめながらそこら中の人に見あたり次第くだを巻きはじめました。

『ね、おい、氷河鼠の頸のところの毛皮だけだぜ。え、氷河鼠の上等さ。君、君、百十六足の分なんだ。君、君斯<sup>か</sup>う見渡すといふと外套二枚ぐらゐのお方もずゐぶんあるやうだが外套二枚ぢやだめだねえ、君は三枚だからいいね、けれども、君、君、君のその外<sup>ぐわいたう</sup>套は全体それは毛ぢやないよ。君はさつきモロツコ狐<sup>ぎつね</sup>だとか云<sup>い</sup>つたねえ。どうしてどうしてぢやんとわかるよ。それはほんとの毛ぢやないよ。ほんとの毛皮ぢやないんだよ』

『失敬なことを云ふな。失敬な』

『いゝや、ほんとのことを云ふがね、たしかにそれはにせものだ。絹糸<sup>こしら</sup>で拵<sup>こしら</sup>へたんだ』

『失敬なやつだ。君はそれでも紳士かい』

『いゝよ。僕は紳士でもせり売屋でも何でもいゝ。君のその毛皮はにせものだ』

『野蕃やばんなやつだ。実に野蕃だ』

『いゝよ。おこるなよ向ふへ行つて寒かつたら僕のとこへおいで』  
『頼まない』

よその紳士はすつかりぶりくしてそれでもきまり悪さうにやはりうつく寝たふりをしました。

ひようがねずみ氷河鼠の上着を有もつた大将は唇くちびるをなめながらまはりを見まはした。

『君、おい君、その窓のところのお若いの。失敬だが君は船乗り

かね』

若者はやつぱり外を見てゐました。月の下にはまつ白な蛋白<sup>たんぱく</sup>石<sup>せき</sup>のやうな雲の塊が走つて来るのです。

『おい、君、何と云つても向ふは寒い、その帆布一枚ぢやとてもやり切れたもんぢやない。けれども君はなか／＼豪儀なところがある。よろしい貸てやらう。僕のを一枚貸てやらう。さうしよう』

けれども若者はそんな言<sup>げん</sup>が耳にも入らないといふやうでした。つめたく唇を結んでまるでオリオン座のとこの鋼いろの空の向ふを見透かすやうな眼をして外を見てゐました。

『ふん。バースレーかね。黒狐だよ。なかなか寒いからね、おい、君若いお方、失敬だが外套を一枚お貸申すとしようぢやないか。』



黄いろの帆布一枚ぢやどうして零下の四十度を防ぐもなにもできやしない。黒狐だから。おい若いお方。君、君、おいなぜ返事せんか。無礼なやつだ君は我輩を知らんか。わしはねイーハトヴのタイチだよ。イーハトヴのタイチを知らんか。こんな汽車へ乗るんぢやなかつたな。わしの持船で出かけたらだまつて殿さまで通るんだ。ひとりで出掛けて黒狐を九百足とつて見せるなんて下らないかけをしたもんさ』

こんな馬鹿ばかげた大きな子供の酔よどれをもう誰たれも相手にしませんでした。みんな眠ねむるか睡ねむる支度しどでした。きちんと起きてゐるのはさつきの窓のそばの一人の青年と客車の隅すみでしきりに鉛筆をなめながらきよときよと聴きき耳みみをたてて何か書きつけてゐるあの瘦やせた

赤あか髯ひげの男だけでした。

『紅茶はいかゞですか。紅茶はいかゞですか』

白服のボーイが大きな銀の盆に紅茶のコップを十ばかり載せてしづかに大股おほまたにやつて来ました。

『おい、紅茶をおくれ』イーハトヴのタイチが手をのばしました。ボーイはからだをかぐめてすばやく一つを渡し銀貨を一枚受け取りました。

そのとき電燈がすうつと赤く暗くなりました。

窓は月のあかりでまるで螺鈿らでんのやうに青あおびかりみんなの顔にはかも俄にに淋さびしく見えました。

『まつくらでござんすなおばけが出さう』ボーイは少し屈かがんであ

の若い船乗りののぞいてゐる窓からちよつと外を見ながら云ひました。

『おや、変な火が見えるぞ。誰たれかかがりを焚たいてるな。をかしい』

この時電燈がまたすつとつきボーイは又

『紅茶はいかがですか』と云ひながら大股おほまたにそして恭しく向ふへ行きました。

これが多分風の飛ばしてよこした切れ切れの報告の第五番目にあたるのだらうと思ひます。

×

夜がすっかり明けて東側の窓がまばゆくまつ白に光り西側の窓が鈍い鉛色になつたとき汽車が俄にとまりました。みんな顔を見合せました。

『どうしたんだらう。まだベーリングに着く筈はずがないし故障ができたんだらうか。』

そのとき俄に外ががや／＼してそれからいきなり扉とびらががたつと開き朝日はビールのやうにながれ込みました。赤ひげがまるで違つた物ものすべし、凄こい顔をしてピカ／＼するピストルをつきつけてはひつて来ました。

そのあとから二十人ばかりのすさまじい顔つきをした人がどうもそれは人といふよりは白熊しろくまといった方がいゝやうな、いや、

白熊といふよりは雪ゆきぎつね狐と云つた方がいいやうなすてきにもくくした毛皮を着た、いや、着たといふよりは毛皮で皮ができてるといふ方がいゝやうな、ものが変な仮面をかぶつたりえり巻を眼まで上げたりしてまつ白ないきをふうく吐きながら大きなピストルをみんな握つて車室の中にはひつて来ました。

先登の赤ひげは腰かけにうつむいてまだねむ睡つてゐたゆふべの偉らい紳士を指さして云ひました。

『こいつがイーハトヴのタイチだ。ふらちなやつだ。イーハトヴの冬の着物の上にねラツコ裏のうちぐわいたう内外套と海狸びばあの中外套と黒狐ひよう裏表の外外套を着ようといふんだ。おまけにパテント外套と氷ひよう河鼠がねずみの頸くびのこの毛皮だけでこさへた上着も着ようといふや

つだ。これから黒狐の毛皮九百枚とるとぬかすんだ、叩き起せ。』<sup>たた</sup>

二番目の黒と白の斑の<sup>ぶち</sup>仮面をかぶった男がタイチの首すぢをつかんで引きずり起しました。残りのものは油断なく車室中にピストルを向けてにらみつけてゐました。

三番目のが云ひました。

『おい、立て、きさまこいつだなあの電気網をテルマの岸に張らせやがったやつは。連れてかう』

『うん、立て。さあ立ていやなつらをしてるなあさあ立て』

紳士は引つたてられて泣きました。ドアがあけてあるので室の<sup>へや</sup>中は俄に<sup>にはか</sup>寒くあつちでもこつちでもクシヤンクシヤンとまじめ腐つたくしやみの声がしました。

二番目がしつかりタイチをつかまへて引っぱつて行かうとしますと三番目のはまだ立つたまゝきよろきよろ車中を見まはしました。

『外ほかにはないか。そここのとこに居るやつも毛皮の外ぐわいたう套をを三枚持つてるぞ』

『ちがふちがふ』赤ひげはせはしく手を振つて云ひました。『ちがふよ。あれはほんとの毛皮ぢやない絹糸でこさへたんだ』

『さうか』

ゆふべのその外套をほんとのモロツコ狐ぎつねだと云つた人は変な顔をしてしやちほこばつてゐました。

『よし、さあでは引きあげ、おい誰たれでもおれたちがこの車を出な

いうちに一寸ちよつとでも動いたやつは胸にスポンと穴をあけるから、さう思へ』

その連中はぢりぢりとあと退りすざして出て行きました。

そして一人づつだんだん出て行つておしまひ赤ひげがこつちへピストルを向けながらせなかでタイチを押すやうにして出て行かうとしました。タイチは髪をばちやばちやにして口をびくびくまげながら前からはひつぱられうしろからは押されてもう扉とびらの外へ出さうになりました。

俄にはかに窓のところに居た帆布の上着の青年がまるで天井にぶつつかる位のろしのやうに飛びあがりました。

ズドン。ピストルが鳴りました。落ちたのはたゞの黄いろの上



着だけでした。と思つたらあの赤ひげがもう足をすくつて倒され  
青年は肥ふとつた紳士を又車室の中に引つぱり込んで右手には赤ひげ  
のピストルを握つて凄すげい顔をして立つてゐました。

赤ひげがやつと立ちあがりましたら青年はしつかりそのえり首  
をつかみピストルを胸につきつけながら外の方へ向いて高く叫び  
ました。

『おい、熊くまども。きさまらのしたことは尤もつともだ。けれどもなおれ  
たちだつて仕方ない。生きてゐるにはきものも着なけあいけな  
いんだ。おまへたちが魚をとるやうなもんだぜ。けれどもあんまり  
無法なことはこれから気を付けるやうに云ふから今度はゆるして  
呉くれ。ちよつと汽車が動いたらおれの捕虜にしたこの男は返すか

ら』

『わかつたよ。すぐ動かすよ』外で熊どもが叫びました。

『レールを横の方へ敷いたんだな』誰かが云ひました。

氷ががりがり鳴つたりばたばたかけまはる音がしたりして汽車は動き出しました。

『さあけがをしないやうに降りるんだ』船乗りが云ひました。赤ひげは笑つてちよつと船乗りの手を握つて飛び降りました。

『そら、ピストル』船乗りはピストルを窓の外へはふり出しました。

『あの赤ひげは熊くまの方の間かんでふ諜たれだつたね』誰かが云ひました。わかものは又窓の氷を削りました。

氷山の稜<sup>かど</sup>が桃色や青やぎらぎら光つて窓の外にぞろつとならんでゐたのです。これが風のとばしてよこしたお話のおしまひの一切れです。



# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十三卷」筑摩書房

1980（昭和55）年3月15日初版第1刷発行

初出：「岩手毎日新聞」

1923（大正12）年4月15日

※「ウエスキー」と「ウキスキー」、「眠る」と「睡る」の混在は底本通りにしました。

入力：マイマイマイ

校正：小林繁雄

2005年2月22日作成

2013年2月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 氷河鼠の毛皮

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>